

D 60

神

人

論

卷一
諸水著

眼
獨
軒
藏
版

252
149



緒言

人は疑問の裡に生、疑問の裡に死、故に印度最古の哲學ウ、ニシヤンドの
 開卷第一章に曰く、吾等何處より生、何に由て生活し、亦何處へ行くや、或
 は誰か命を授けて生活せしむるや、苦痛のためなるか、將た快樂のためなる
 か、と是の疑問を解決するを、人生觀と謂ふ、人は自然に生、即天然に生た
 るは、抑文字宙の根底即神の濫與を解剖して、人生の
 道と謂ふ、抑文字宙の根底即神の濫與を解剖して、人生の
 論として、人生の要道を摘示す、茲に於て、謂所世界的宗旨
 を以て本書の結論となす、故に余は是を命するに神人論
 なり、然に本書は便宜のため、章節項を別つと雖も、實
 を以て、始より終にまで、順を追ふて、讀まされは或は解し
 難し、或は細讀すれば、書中多くの答弁あるを見
 出し、或は本書に對する疑問又は發論を寄する人も無きに非
 るに無論、夫等の多くは本書を精讀せざるより出づるならんとは無論也、余
 は草莽一介の匹夫、學者に非ざるは勿論、故に説明する能はず、唯余の信
 仰を主張するのみ、余の天下の學說を尊敬す、余の説を、寛ふせよ、若夫、
 過めれば指教せられよ、余は眞理に従ふを各む、若し非なるを、請ふ諸兄
 余が此の書を通讀する足下は、余が謂所倫理絶對迷信打破の同志即知己
 なり、且知友ならむ。

明治乙巳中秋於眼御軒

佐々木清水誌

38 12 23
 内交



(佐々木清水著作書目次)

才士佳人の概談 全
雲間の月(翻譯) 全
楓葉物語 全
楓迺錦 一三四五
宗教論 全
言文一致用文 全

作文資料 全
韓文典 全
和文典 全
續東洋政論 全
湖上の月(翻譯) 全
其他數種

神人論目次

第一章 宇宙觀

第一節 宇宙は無窮無限

一 項 化學者の見解……………一

二 項 自然の活動……………四

第二節 宇宙の一体觀

一 項 團的一体の大なる意味五

二 項 宇宙は眞的實体なり……………七

第二章 人生觀

第三節 生死の意義

一 項 生命の相眞……………一二

二 項 活欲の根本……………一二

三 項 自然の結果……………一三

四 項 人は一代の動物に非……………一四

五 項 死の由來……………一七

第四節 自然の法則

一 項 最大不幸と最大不倫……………一八

二 項 生命の分殖……………一九

三 項 感 化……………一九

四 項 夫婦の須知……………二〇

五 項 理 想……………二二

第五節 道 德

一 項 道德の始源と教祖の異説……………二四

二 項 進化的道德……………二五

三 項 仁愛の主義……………二六

四 項 日日の義務……………二七

第三章 宗教觀

第六節 天神主宰說

二 項 神の力……………三〇

三 項 隠れたる神の實体……………三〇

四 項 同体の實体と現象……………三一

四 項 神……………三二

五 項 祈 禱……………三三

六 項 神通力……………三四

七 項 神の訓言……………三五

第七節 多神教の起るの由來

一 項 信仰心の起元……………三六

二 項 多神教の二大別……………三七

一 理想神……………三八

二 實在神……………四二

三 項 理想神と實在神の同化……………四二

第八節 結 論

一 項 靈魂と形體との關係……………四八

二 項 人の神に對す依頼心……………五〇

目 次 終

正 誤

本書活字の誤を正すと雖も尙校者の目を洩るるものあらん事を恐る。讀者の指示を得は幸甚なり。

- (二)七行目解すへき布かひ。解すへきか) (二)八行目ヘッケルの語はヘッケルの迷語) (同同。散しは。散布し) (一六。七行目手舞は。手の舞)
- (二〇。三項夫婦の順知は。四項夫婦の須知) (二〇。十行目生人は。人生)
- (二〇。四項は。五項) (二六。二項は。三項) (二七。三項は。四項) (二七。九行目裡体は。裸体) (四六。十行目天照大神太陽は。天照大神を太陽) (四八。四行徴せばは。徴せば) (五一。耶は。聊)

神 人 論

佐々木清水著

第一章 宇宙觀

第一節 宇宙は無窮無限

一 項 科學者の見解

(1)

森羅萬象凡て宇宙間の問題は、凡非凡の別なく絶対に疑問の大結塊ならむ。又絶対に想像に過ぎざるのみ。人若し、否な、と謂ふ者あらは、彼は人類の俗物、否な、愚の愚なり、唯一理を推して自信力に確信するのみ。先づ讀者の知り得る眼前の事實より窺はむ。

宇宙は大サに於て限無き空間を占め、長サに於て窮無き時間に渉る、譬へは萬物を包蔵する大囊の如く然り、觀よ。大は既に斯の如し。雖然、地球を以て無極に比すれば何ぞ夫れ小なるや。蚊虻の睫毛一片たにも若かさるなり。嗟々。大も無上、小も亦無上、吾人の想像と智識と理解力にも入らざる宇宙なる者を。學者は如何に解すへきか、歐米全体の智識の代表者と稱せられる哲學者、ヘツケルの語に曰く、數多の米粒的地球は宇宙の全体に散布し。其總体の上に成滅の状態あり其生する者は進化し進化する者極度に達する時は再度の退化を始む。退化の極度に到れば即ち死す。天に現はれたる彗星の如きは生れ

んとする卵の如くにして我が太陽の如きは進化程度に極處に達したる者也。以上より多くの老たる世界も既に死したる太陽も宇宙の至る處に有り死して再び生れ返らんとする浮塵も亦た幾許あるを知らず。而も進化の程度は殆ど我が地球と相似たる浮塵には、既に海陸の差別を生じて單的生物を生したるあり、單的生物が進化して人類に達し或は人類以上に達したる所も無きに非ざる可し。依之觀之。吾等人類は幾多浮塵に寄生せる微粒の働物にして宇宙の實体より見れば、更に人間の體中に寄生せるバチルスと毫も異なる所無しと、誠にヘツケルの謂ふ所、眞に然り、地球や。太陽は宇宙の無限、其絶大に對しては

實に浮塵なり。人は全くバカルスなり。科學者の斷定は必ず茲に執着せざるを得じ、と何人も斯謂ふなる可し。

二項 自然の活動

人は小なりと雖も其心わ小ならず。想へ。人の心の如く神妙不可思議なる者は非らず。觀よ。人眼僅に分秒の圓形と雖も實に過去現未來の一切三千界を藏す、而して其腦中に存する感能力の如き實に驚く可き力を有す、嗚呼人の思想の走るわ光線の走るに億々萬倍す、若夫れ人として斯の幽妙なる快速力無くむば、宛も天地に太陽の光なきか如し、天地晦暗、萬物冥滅、物体も形を爲さず、花は咲け雖も美を爲さず、鳥は野に吟して聲を爲さず、謂

(4)

所漠々の裡に物躰動と物躰動の暗闘するに過ぎざるのみ。唯一心在つて萬機を動すのみ。故に耳目自然に生ず。是を以て死せる者活き。無心にして自然に活動す。默せる者自然に笑ふ、誠に心ある者は光明なる哉。既に光明なり、人の心靈の來る所の深且遠なる事亦無窮なるを知り、宛も百川日ひに流て止らざるか如く、千古の萬流海に注いで満たざるか如し。

(5)

第二節宇宙の壹體觀

一項 團的一體の大なる意味

以上に述ぶ所は所謂肉眼の觀察とも謂ふ可き者なる可し。眞の宇宙觀は之に非ず肉眼の外に心眼を飛ばせて宇内

を觀察せば何人も第一に認めざるを得ざるは宇宙の一躰
たる事に在る可し。

(6) 形よりの之を見れば宇内一物だも獨立せず。大概全宇宙に
屬し、宇宙總躰より支配せられて團的一躰の大なる意味
を爲す、譬へば、頭足指爪口腹肺肝悉く別種の意味あるか
如しと雖も實は人の躰格てふ一個の大極に屬し自個の意
味か悉く人身壹躰觀の意味に歸すると一般なり。頭部の
血管は足底に曲下し足部の血液は指手を順環じ、腹中に
傳へて肺肝に至る故に手足を環る血は頭腹を環るの血と
相關聯す、其間に何の區別かある一體洞貫實に一物の境
界なし。宇宙と萬物とは即ち此狀態を離れざるなり。宇

(7) 宙の萬物を總括する爲に設けたる者に非らずして一個不
抜の實體なり素より身躰か頭足指爪口腹肺肝等を總稱せ
んか爲に設けたる代名詞に非ずして頭足指爪口腹以上の
實體なるに同じ。

二項 宇宙は眞的實體なり

一夕微光を帯ひて歸るの時、前林の楓葉を拂ひ、靜なる
深淵に落來たるを見る。斯の紅葉一點の落葉と雖も宇宙
と別なるに非ず。請ふ念へ。一立楓樹の一端なり。抑も
斯の端的一葉は何處より來る、地に生する草木なり即ち
土の變體なり。土は地球の面積なり。地球は何處より來
る。過去億萬の昔、大空に遊飛せし星の一体なり。星は何

處より來る、全宇宙の發動的物力の分置より來る、此元的物力より一點の落葉に至る迄の間に何の切斷せる區境あるや。唯全宇宙物が種々に變轉し亦た轉旋して斯の點的落葉として變幻せる者に非すや。然も斯の楓樹と謂ふは假定的名詞なり。故に實體は宇宙なり。借問す此一物に就て假定名詞を與ふる吾人自身は何物ぞ。唯に土塊の變形と謂ふの外なきなり。億萬年來此點的一葉と系統を同ふして來り全宇宙に對して此葉と同一に關聯し此葉に對しても同一に關聯す。尙借問す此葉が淵に落ちたるは何の爲ぞ。物質は素より活物なり。彼は淵に向て自動せんと欲す換言すれば淵と

相接着せんか爲なり。而も葉は小、淵は大にして我彼を呼着する事能はさるか爲め我彼に行きたるなり。細言せば塵は輕さか爲に我に着さ山は重か爲に我彼に行と同一理なる可し。即ち知る全宇宙の力と落葉一點の力と全く同物にして其間に何等の絶縁別離の區境非ざるなり。謂く葉と形とは假定名なるか故に永久なる能はず。然も其體質は宇宙の實體なるか故に永久不變なり。是を裂けば二となり、焼けは煙となり、消ゆれば灰となる。煙となれば空氣に歸し、灰となれば土に歸す。空氣となれば風となり再び地に落ちて草木を捲き去るやは測る可らざるなり。土に歸すれば再び草木となりて淵に落るの歴

(10)
史を繰返すならむ。或は寒淵落葉を眺めて悲愴なる感慨
を起せる文人墨客となるやも亦未だ知る可らず。
最後に借問す。斯の如く變轉化合して止まざる此等の各
物体は其何の時。何の形か實體なるや。即此自の本躰は一
葉か天月か。將た太陽。將た亦た人間か。曰く皆是現象
なり。假定名なり。唯此の現象の一切を通したる者が眞
實即ち實體なり。而も現象の一切を通するは無窮の時と
無限の所に涉る。即ち宇宙の凡てに涉る故に宇宙のみが
實躰なり。萬物唯宇宙の現象萬物個々の意味を全く宇宙
の凡てに歸す。

第二章 人生觀

第三節 生死の意義

一項 生命の真相

(11)
五尺軀に横れる此靈は、如何に不可知の者と雖も素より
生命の真相矣。之を生靈と謂ふ。肉體を離るゝ時は死靈
即ち魂魄となるなり。之を哲理に照し事實に徴するに宛
も宇宙の心靈が大なる造化たるか如く、此生命も一軀の
小造化力なり。故に生命は全く自ら己を作る力なり。世人
若し斯理を解せざるものは往々にして謂ふ、生命は物質
を組織したる肉躰の作用なり。と是所謂本未を轉倒する

(21)

者なり。肉躰が生命を作るに非ず生命が肉躰を作るなり。故に生命去らば肉躰は瓦解す生命の在る所に肉躰是に從ふ。譬へは人の舟に乗れるか如し舟覆れば人必溺死す。思へ。生命は肉體の作用なりと謂ふか如きは舟能人を作ると言ふに同じ、滑稽なる哉。嚙語も亦た甚し。舟能人を作るに非ず却て人の作る所なり。人は生命の實體と有するに於て一種の自作力なればなり。

二項 活欲の根本

生物界其者の滿腔に百裂せんとする、熾なる發氣力の在る事は整然として明なり。學者は之を衝突力と謂ふ謂所内より突きて外を動かさむるなり。今の高等生物界に

(13)

有る意志情欲の如きは。此の衝突力の進化なり。此氣力は今の人類にも一般に存して人類行動の大なる部分と支配す。故に如何なる困難に遭ふと雖も唯活さむ事を欲するなり。即ち一種の盲進突撃の力なり人類固有の原動たるは察するに何の難さか是有らむ。

三項 自然の結果

此の氣力に伴ひて苦痛と快樂との感あるへし。衝突裡に燃へて發らく能はずんは。彼れ苦痛なり。不平なり。衝突の意既に發して盲進突撃を護は。彼は快樂なり。自得なり。征客己の渴し浚水の音を聞て谷に走るが如し。此誠に沙的比喩と雖も意味即大なり。

亦想へ。吾人が一日の饑渴に堪へ、一夜の睡眠に堪るの抵抗力を感ずる以所は何ぞや。他無し。生命を欲してかり即食を以て生命を續き睡眠を以て疲労を休養するなり。故に曰く。命は食にあり睡眠の休養は精心を豊かにらしむと。

四項 人は一代の動物に非ず

人は永久に活く、素より無究に活るの道あり。此道を求むるには未來に非ずして現在にあり、吾人が現在に重す現在は飛泉の如く流れ去ると雖も、哲眼して是を凝視せば現在も亦不滅。吾人は既に生命の不死を觀。亦感化の不死を見。更に靈魂の不滅を悟ればなり。人は一代の動物

に非ざるを余は既に断定す。宛も其靈魂は實に宇宙に馳。其生存は全永久に歸せざる可からず。力と養ひ人を救ふ即人道に外ならず然も是に宇宙の大道即卽の道のる事を記憶せよ、道とは何ぞや知命樂天の人たる即ち是なり。見よ。月は皎々として萬物を照し、風は颯々として白雲を、鳥は啾々として野に吟し、花は艶然園に笑ふ、天地六合は將に是眼前の天國なり。此美此妙此愛此真即是造化の現象に非らざるか。人は之と化し、之と行き、是と睡り、自然の境に逍遙し、有形の外に靈脱し、風雲の關を靜行し、市井の裡に仙居を有し、萬世を遠觀し、適々として貴賤貧富の位置に自得し、蕩然として更に塵埃に

染まざるの思念を業し了り、超絶精脱、常に不羈の境に樂む神の道を悟らる可らず。此事條や頗る難し、然雖哲學的事條の極所は之を説さるを得ざるなり。且夫れ人は何物を。其壽蓋五十年、其長き者百年は古來稀なりと謂ふ。然則。其學、其業、其人、其身、終に夫何物ぞ。歸する所は腐肉か、骸骨か、一棺の土か、詮じ來れは、茫然自失、殆と手舞足の踏む所を知らざるに至る。ミル氏曾て一夕筆を投し嘆して曰く。ア、余れ終に死せざるか。と蓋其當時泡沫的の人生に思ひ至る事ありて斯は嘆息したるからん。營々汲々。業務に驅られて人多くは此問題を等閑に附し去るに至る雖然若し日月忽として逝き老の

將に來らんとするに至ては即ち方寸の胸裡は直に此問題に充たしむ將た亦不治の病に罹り人生更に望み莫きの非境に人らは、即更に此問題に襲はるへし。余曾て此難題に遭ふて更に其解脱を得る能はず。志氣忽ち碎け生氣頓みに消散して茫然自失。更に何の爲す處を知らざるに至る。今や本書を稿するに當り往時と追懷して其凡なる事を悟れはなり。

五項 死の由來。

人の生命には根本に死と謂ふ事は絶對的に皆無なり。何處迄も分殖に分殖を累積して進化するものは是れか生命不死の主義なり。雖然。吾人の形骸には死と謂ふ事あり

如何に滋養物を食ひ如何に健康の地に住むと雖も。之か死を免る事は絶対に爲し得ざるなり。此現象を細視せば生は死の反對に非ざるを知る、生か向上的の一手段たるか如く死も亦向上的の一手段なり人は死の爲に死するに非ず死の爲に生くるなり。

第四節 自然の法則

一項 最大不幸と最大不倫

人は両性の配偶を倫理の大本と爲す。蓋天地二性と陰陽二氣の配偶に則とる。故に配合して二性の合體を行へば壹體となりて肉躰は死するとも、實核は子孫に遺傳して其生命を無窮に繼續す。若し配偶を得されば肉躰も生命も

共に全滅なり。故に子なき者は人生最大の不幸なり。若亦歴世的獨身主義の人は不倫の大なる者なり。彼は天意に戻り。神聖に負けるなり。

二項 生命の分殖

以上の如く説き來れば親と子は絶対に無差別にして親に住みつる生命が移轉して子と成る故に我子は第二の我にして我が親は我が前身なり。我等の生命は遠大長久の生命なり。

三項 感化

我が餘命の存する間に於て我精心 我の理想。我が志望をして悉く子の精心に注人し薰陶し子の精心の一切を舉

けて我か精心たらしめ我以上の目的と志望を遂げしむるに有り是を倫理の大元則となす。而して是等の意義より推測せば家庭と謂ふ者は、我が安息を求め、我業務と休養とを求むるのみ使用す可き場所なりと思ふ誤解なり。元來家庭なる者は子孫を感化して次の我たらしむ神壇なり。學校なり。

三項 夫婦の順知

以上の論法を推度せば。夫婦なる者は。如何に神聖なるかを見よ。夫婦は心身共に全壹なり。故に合體して初て我生命を新鮮なる肉躰に移さしむるを得。本來生人の自的即倫理の大條自を達するを得るなり。

思稔せよ。人の道は端を夫婦に關ぐ。謂所國家の最元素にして其起る所小なりと雖も、志望は素より遠大なり。元來妻は夫の翫弄物に非ず。若し夫れ理想的の夫婦にあらんすは、後日必家を破る。家破れざるも春風團樂の家庭を作り得ざるは無論なり。大概遠大なる事業の成功と失敗は初め妻を娶るの際是か良否を選んで結婚すると否とに依て多くは是に原因すへし。故に男女の結婚は爾來其品性と價值を定むる處の市場なり。故に夫は妻を選ひ妻は夫を選ひ大に相敬愛せざる可らず。而も一夫一婦の制限が生命必然の要求なる事も自ら明瞭なり。

四項 理想

けて我か精心たらしめ我以上の目的と志望を遂げしむるに有り是を倫理の大元則となす。而して是等の意義より推測せば家庭と謂ふ者は、我が安息を求め、我業務と休養とを求むるのみ使用す可き場所なりと思ふ誤解なり。元來家庭なる者は子孫を感化して次の我たらしむ神壇なり。學校なり。

三項 夫婦の順知

以上の論法を推度せば。夫婦なる者は。如何に神聖なるかを見よ。夫婦は心身共に全壹なり。故に合體して初て我生命を新鮮なる肉軀に移さしむるを得。本來生人の目的即倫理の大條目を達するを得るなり。

思稔せよ。人の道は端を夫婦に關ぐ。謂所國家の最元素にして其起る所小なりと雖も、志望は素より遠大なり。元來妻は夫の翫弄物に非ず。若し夫れ理想的の夫婦にあらんすは、後日必家を破る。家破れざるも春風團樂の家庭を作り得ざるは無論なり。大概遠大なる事業の成功と失敗は初め妻と娶るの際是か良否を選んで結婚するに否とに依て多くは是に原因すべし。故に男女の結婚は爾來其品性と價值を定むる處の市場なり。故に夫は妻を選び妻は夫を選び大に相敬愛せざる可らず。而も一夫一婦の制限が生命必然の要求なる事も自ら明瞭なり。

四項 理想

理想心を無形の思念として、凝結せしめたる觀念と理想とは謂ふなり。誠心上の道は理想の支配を受るなり。理想は人の光明なり。故に心の暗を照す。理想は自他を慰め且人をして艱苦に堪へしむ。理想は心身一線の力なり。故に我をして豊かならしめ且つ大ならしむ。元來人生上道德の如きは理想を以て最高の標準となす故に理想莫き道德は道德に非ざるなり。

新緑翠明柳風の下。余は是を悲む。今の新聞に理想なし。彼か日々の社説と雜報は捏造より捏造に終り中傷より中傷に終る。非徳に非ずして何ろや。諂ふ者に贅辭を與へ。反する者を中傷す。朝九の党は夕の仇。彼に一定の同

志なく、握手の友なし。宛も浮雲の如く且掌を覆すよりも猶ほ輕し。彼は人の被讒被謗に苦むを見て却て之を嬉む者の如し。彼か日々の記事は正義の文壇に於て腐錢一文の價直も無し。思へ。獨新聞に限らず凡て理想なき人は大概斯の如しと謂ふの外なきなり。

余は常に是を歎く。曰く。人生に於ける變現か將九變象か。今や輕薄なる世界は廣告と自賛の世界とたれり。見よ。個人と社會と政治と新聞記者と博士と商賣人と皆悉く廣告を利用す。曰く、處世の秘訣は先第一に名を賣るに在りと自賛已に個人と個人の集合体に於て亦非徳なり。唯廣告を利用せざる者は獨り強竊盜のみ。淫買婦のみ。嗟

理想心を無形の思念として、凝結せしめたる觀念を理想とは謂ふなり。誠心上の道は理想の支配を受るなり。理想は人の光明あり。故に心の暗を照す。理想は自他を慰め且人をして艱苦に堪へしむ。理想は心身一躰の力なり。故に我をして豊かならしめ且つ大ならしむ。元來人生上道德の如きは理想を以て最高の標準となす故に理想莫き道德は道德に非ざるなり。

新緑翠明柳風の下。余は是を悲む。今の新聞に理想なし。彼か日々の社説と雑報は捏造より捏造に終り中傷より中傷に終る。非徳に非ずして何らや。諂ふ者に賛辭を與へ。反する者と中傷す。朝九の党は夕の仇。彼に一定の同

志なく、握手の友なし。宛も浮雲の如く且掌を覆すよりも猶ほ輕し。彼は人の被讒被謗に苦むを見て却て之を嬉む者の如し。彼か日々の記事は正義の文壇に於て腐蝕一文の價直も無し。思へ。獨新聞に限らず凡て理想なき人は大概斯の如しと謂ふの外なきなり。

余は常に是を歎く。曰く。人生に於ける變現か將九變象か。今や輕薄なる世界は廣告と自賛の世界とたれり。見よ。個人と社會と政治と新聞記者と博士と商賣人と皆悉く廣告を利用す。曰く、處世の秘訣は先第一に名を賣るに在り。自賛已に個人と個人の集合体に於て亦非徳なり。唯廣告を利用せざる者は獨り強竊盜のみ。淫賣婦のみ。嗟

々。神人論の世に出る亦宜ならずや。素朴なる神人論は神と共に永久ならん事を欲する者なり。

第五節 道德

一項 道德の始源てふ教祖の異説

所變れは品易ると謂ふ風ぞ。氣候風土の異なる毎に人情自然に差を生じ隨て道德の教も國に依て異同あり。印度に釋迦あり。猶太に基督あり。希臘にソクラテースあり。支那に孔孟あり。各々其教を説く事細大漏す所莫し。其説く所。各自の自觀に出るか故に異説紛々未全く其正教を獲ざるは残念の至ならずや。

釋迦は眞如涅槃を説き、基督は天帝の説を唱へ、ソクラ

(24)

テースは智徳壹体論を著せり。孔孟は仁義を説て木鐸と稱す。後の信する者那邊に憑て之か教を受くべきや。殆ど迷路に向て附去るの外なきなり。此故に余が考察せし所の卑見を述へ以て江湖の學者に正誤を俟ねんと欲する者なり。

二項 進化的道德

夫れ進化なる者は天然に遷轉するを謂ふ唯た自然に則るなり。説く者生存競争と言ふ。時を得る者は榮へ、失ふ者は亡ぶなり。或は評して曰く、優勝劣敗、又は弱肉強食と謂ふ。更に道德の意味莫く却て不道德の意味あるに似れるなり。雖然、語中必ず眞理なきに非ず。細觀す。

(25)

進化律は斃れて止む迄に勉強せしむるのみ。

天は強榮弱滅を欲せず、唯た道德ある者を榮へしむるあり、宇宙か萬物に下す自然の判決なり。

二項 仁愛の主義

仁愛の最も切なる者は男女の戀情なりと。雖然、此愛や盲情にして妬情を生ず。故に愛の最も私なる者なり、眞の仁愛は眞理に合して明且つ公なる可し、其力は戀情の如く、其密なる慈母の兒に於けるか如き愛情を謂ふ。

西郷隆盛と、高山彦九郎は仁愛主義の人なり、前者は國家に優りて正義を愛したり、後者は忠君を重んじて土拜の笑をも顧慮せされはなり。眞の仁愛の存する所和氣あ

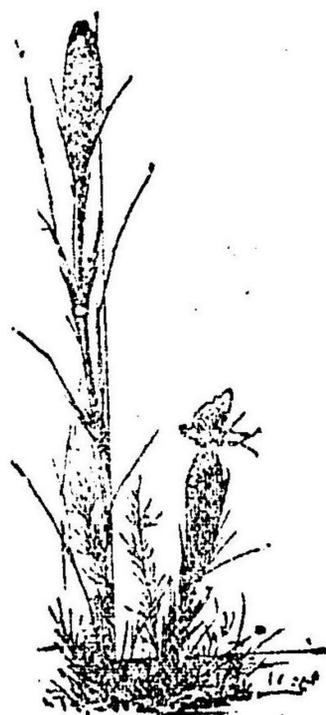
り、調和あり、歡喜あり、優美あり、若し夫れ愛をければ衝突あり迫害あり、無仁なる時は、火を戦はすか如く、仁愛は雙蝶の花に於けるか如く、春風自然に存す、而して花蝶の眞趣と春風自然に動く處神は自然に福音を與ふへし。

三項 日々の義務

凡そ人此世に在ては日々の生活に對する義務莫かる可からず。元來人の此世に生るゝ、何の一物たも携帶するに非ず、裡躰一貫何ぞ貴賤貧富の別在らんや。神に對する日々の報酬の爲めに精心を以て果すより大なる徳義は非ざるへし。學者が一身の利害も顧みず眞理の研究に一生を

委ぬるか如きは、道德の最も大なる者なり、義務とは絶体に物を返すか如きを意味するに非ざるなり。凡て務と云ふの意にして即ち天分なり。天職なり、本分即ち職務と言ふなるへし。思へ、楠正成は仁愛なる真正の道德主義の人なり、彼は勝敗の赴く處を知りながら義務と責任とを避けざるなり、大石良雄も、亦其人なりし。彼は國法を犯しても、人世觀を實行せり。抑も義務を果すは容易にして容易に非ず、楠公と大石氏の義務の如きは特に至難の行爲なり。快樂を棄て自由を殺くなり、宛も孔子の身を殺して仁を爲すとは將た是を謂ふなる可し。是之れと真正の犠牲とは謂ふなり。此犠牲に甘んずる者のみに

神は福音を興ふるなり。故に已に死したりと雖も其名は
無窮に傳へて今尙古の如く忠魂碑と共に巍々として高く
聳へて天真爛漫たり。



第二章 宗教觀

第六節 天神主宰說

一項 神の力

神は天地の主宰にして、宇宙の萬物を統御する者なり。是を神に於ける至道の力と謂ふ。蓋し此力は別に一種の魔力を有す。故に何事も此力を以て萬物を造らる。曰く「**良置く者は只其力に由て物を支配す。と其力は世界を造りし後、再び捲て彼に歸へす此等現象力の點より是を造物者と謂ふなり。**」

二項 隠れたる神の實體

細言すれば自然萬物は、幻術的存在にして實體の真相に非ず。實體は此萬物に隠蔽せられて、吾人は是を直視する能はず。故に曰く。其一神自ら好て自体を蔽ふ事宛も。蜘蛛が糸を以て其身を蔽ふ如く。最大元素より糸を引き。彼は萬物の裡に隠れ。瀰漫して萬物の躰となれり。再言すれば自然萬物は虚妄的存在にして只宇宙の力を有する神の幻術を行ふ間の存在也。故に神は再び捲て是を自躰に歸へす時は此等萬象は夢の如く消散せん。故に神の本體は宇宙の實體にして現象は其の一面なり。

三項 同体の實體と現象

今是を簡單に辨別すれば、實體は均一無差別的にして現

象は差別的なり。雖然本躰と現象とは元同体不離の者にして唯一物を二面より見たるのみ全く別物なりと云ふ者の如きは、所謂海洋の波形の如く、波の沖より來るを見て是を水に非すと云ふか如し。

四項 神

宇宙の實體と謂ふ者は神なるか、曰く。實體は實體なり。吾人は神と謂ふ語が動もすれば人として神人同形の想を起さしむるを杞憂す。若し神と云ふ形容詞が宇宙の實體を指すに非されは殆ど何れを指すやを知らざるなり。又た能く一語にして何人にも靈妙の萬一を想はしむ可き語を求むれば神と謂ふより外に形容詞の在るを知らさ

るなり。素より宇宙の實體は神なり。此神は多神教の神の上の神あり。只た一貫神教は其進歩したる謂なるへし此神や人間の肉眼に顯れ且つ一定の場所に安置し玉ふ神にも非ず、天地間に存在して萬物と偕にあり。宇宙間一として神の存せざる所無く、其小にしては顯微鏡を用可き者も其大なる者は宇宙に至る迄大小細大漏さずして神の宿給はざる所無きなり。若夫異教漢は是を信せずと雖も、神域則ち宇宙間を脱する事は絶體に不可能なり。

五項 祈 禱

人は此神に拜禮を施すべきなり。且つ一心を信賴すへきなり。曰く然り、雖然禮拜と願望の爲に形體的關係を一毫た

りとも變し得へしと念はば即ち迷信なり。神は唯れ靈線の關通する所に憑て往來すへく。宇宙の大心靈と人間個體の一小心靈と妙然神通するに到て精心上に異様の現象を發起するか如きは敢て奇怪には非ざるなり。心理上に於て素より當然なる可し。

六項 神通力

以上説くか如く所謂靈なる者に二種あり。即ち萬有精心和個體精性となり。萬有精心は其大なる者にして即ち宇宙の大心靈にして個體精心は各自人間の生靈なり。故に大小靈は一にして大同小異なれば實體上に於て猶無差別あり。されは我が心靈に神性を感受せん事を求むる者は

唯だ一心に己の精心を一途に歸し一直線を盡するが如く
眞心を集中し心意を凝らして一直信を發起する時は不知
不識の間は大心靈に神通して神妙不可思議の現象を見る
事象より明斷する所なればなり。余が謂所此魔力の如き
神通力に於ては古來愚民を瞞着し且つ欺さつつあるが如
き破誠僧侶や盲的教導職輩の類に非ず。唯宇宙の眞理と
心理學上に於て明白なる事實にして學理に明達する者の
決して疑を入れざる所なり可し。

七項 神の訓言

心とよ巳の行ひを汚して神に拜禮する勿れ日日一心に罪
惡を擲造しつゝ祈禱するが如きは何の益眞實の心をもちず

却て神の怒に觸るゝなる可きを疑を勿れ。迷ふ勿れ。神
は正心に祈禱する者の精靈に力を與ふ。若し神の助力を
得ざる者は正心未足らざる者と念ふ可し。神は心靈の窓
に射映す。故に神の福音の下に生存せんと欲する者は唯
た永遠に此神と共に在る事を信して恭謙に、謹直に、快
活に、心を持せば我居る處即ち神の宮殿なり。故に神は
眼前に天啓して、曰く、博愛なれ、潔誠なれ、義務を果
せ、健全なれ、勉強なれ、正しかれと此神の姿を示す處
は精靈の窓なり深く自心に反省して之に接せよと

第七節 多神教の起るへき由來

一項 信仰心の起元

日本太古の民が天地間の萬象に就て各自其神有て支配する者と信せられたる。狀況の一般を窺へは。大陽。月輪。萬星。海山。水火。草木。等悉其神ありと信せり。故に天地間に無數の神の散満するやを思へり。是を以て八百萬神の語ある以所且我國の神道を以て多神教と見做せはなり。

二項

我國民が斯如の萬象を尊敬して神と唱へしのみならず。未嘗て其形體を見る事なきも。其存在を認知し。且是に尊敬を加へざる可らざるを相像せしより自己の胸中に描出せる神多し。故に余は先日本古代の人民が崇信せる神に二種ある事を認むるなり。即實在神と理想神の二つなり。

今や余が斷定を降し二類の神に就て稍々詳述する處あらん。先づ理想上の神より始めん。

一 理想神

意味なる世人は。理學的の知識に乏しか爲に自觀力も推知力も更に皆無てふ智力の活用も鈍しか爲に、一單推知し得る者も忽忘却し。亦常に一險せし事も念頭に配する事薄ければ、自己の常に見聞の外珍奇に感ずる者に遭へば、甚是を畏怖する傾あり、且迷信に陥易きなり。故に年來歳を追ふて甲乙と誤解より誤解に導き終に全く誤解に陥らしむ。是を以て説く所は囈語となり。信する所は迷信となるなり。

今や吾人が理學的の知識を滅殺して天地間の萬象を看よ。最大火珠の如き者東海に現れ徐に中天に昇れと暗黒世界は忽清明世界に遷り。之の大空に懸る間は清明を永續するも更に西海の彼方に隠るゝ時は再び暗黒世

界に復するなり。夫れ大火球は大空に懸て萬空を照すと雖も黒雲一たび是を蔽はし。忽暗黒世界となり、時に油然として糸曳く水は篠を束ぬる如くに漲來り山野草木潤はぬ所なく。塵空中に轟々たる響を爲し眞か如く、走か如く、枝折れ葉は散り、根を抜き海上波濤を躍らして岩礁をも捲き去らんかと思れは忽萬空皎々として萬星天の一對に現れ來る。嗚呼。日月星辰風雨の如き千變萬化斯如きを見れば、一物一事奇々怪々ならざるはなし。其他溪澗の深き所、一たひ大聲を放ては萬溪忽之に答へ。亦一たひ微聲を發すれば忽之に答て相響く、其他降雪陰霧長虹電雷を始め草木の發育。禽鳥の孵化に至る迄て殆んど觀すれば奇の奇、怪の怪ならぬはなし。

無智力無推理的蒙昧の民にして是を見聞するに於ては、實に彼をして惑はしむる者幾許ぞ。余は他の蠻民か天地間の萬象に就て種々の誤解を付したる事の二三の例を擧て如何に蒙昧なりし日本人か等しく天地間の萬

象に就て疑感を解かしめんとす、アイヌニヤ人は太陽の没するを見て海に没して海水に浴し以て晝間の疲勞を癒する者なりと信したり。甚しきは亞米利加土人かコロンブスの船を見て白鳥なりと解せしか如き實に笑ふ可きなり。

斯如く蠻人は其知る所を以て其知らざる所を推知するか故に、素より甚しき誤解を來たす事は當然なれども其推考力を以て推考し能はざる者に至ては、究竟一の靈妙不思議に歸着せしめざるへからず。彼等か是を靈妙不思議として推考し能はされは、幾分か畏怖心を懷かしむるは亦當然なるへし。畏怖心起ると共に是を自己の長上に置て崇敬の念を生し是か歡心を迎へんとするに至る可し。

日本太古の人民悉く斯如しとは謂へからざるも。自己の見聞以外の事物に就て怪疑を懷き、是を推考し不能と共に、自己の長上に置て崇敬せし事の狀況は大抵此の如きか。現在邦人の妄信を謂はし、電雷を以て鳴神

と敬ひ、辰樓を以て龍宮の神の城郭と思ひ。颶風を以て風神と爲是則人情の自然にして何の不思議あらん。然に闇昏なる人民は神異として崇敬の念を起せばなり。現時猶然す。況んや太古蒙昧なる世人に於てをや。斯如く人類は奇妙不思議なるものあると共に、是を怪み是を崇敬する心を生したるも未だ禍害なき限は其信仰は甚薄弱なるものなり。天災地妖彼をして直接に最大禍害を被むらしめ、彼等妄信は忽勃發して直に迷信に陥らんとするは無論なり。

看よ。天地雖然雷鳴心肝を寒からしめ、暴風萬物を捲去るか如き、海上俄然激浪を躍らし船をも覆さんとせば、何人も恐怖すへきを見るならん又屢々疫病流行し來りて一郡一村の人民甲乙丙共に枕を列ねて斃る、時は、亦何人も恐怖の念を生ずると共に妄信は忽生して迷信を起せばなり。斯如く世界には人力を以て抵抗防禦に堪へからざる靈妙不思議の力を有するものあり。人命の生殺興奪の權をも具体するものと思慮せば、是を

畏怖するも供に是か歡心を迎へて永其福利を仰ぎ其か災禍を脱れんとするに汲々たるは自然なり。遂に其極の是を長上に置て是を神と稱して尊敬欽慕するに至る可し。

以上論ずる所悉理想より起來るか故に余は是に名命するに理想の神とは謂ふべきなり。

二 實在神

實在せし神は抑如何なる靈物を指すやと謂ふに。其形體の實在を明視し得る者にして神として崇敬せらる可き性質を具へたるものは是なり。大概古代の神として崇敬せられたるものは人類以上の階級に有るのみならず。劣等なる下等動物も亦神として崇敬せられ、常に詩人か無心無情に其比を取る木石の類も亦或場合に於ては神として崇敬せられたり。更に極言すれば、動物崇拜植物崇拜自然物崇拜等の迷信は我國民の間にも存したりき。雖然、我高大原人種の高等社界に於ては斯如き迷信は甚稀にし

て若し是有も又是を崇拜する事妙し。

祖先を神として崇拜する風習

謂所祖先教なるものは、我國神道の骨髄なり。無智暗昏な、蠻民も、恒に祖先と崇拜する事を忘れざる者多し。獨り我國のみならず亞非利加等の土蠻中にも祖先教は既に存せり。

我國皇室は天照大神を祖神なりとして伊勢の宇治の宮を宗廟とし祭儀の厚き事亦比類有る莫し藤原氏は其祖天兒屋命を氏神として祭祀懈らす。且亦春日社は藤原氏か朝野の間に勢權赫々たりし時。最重せられたり。頼道をして春日の神威も今日限りなるぞと絶叫せしめたるは、其勢威を滅殺せられたる秋なればなり。近くは徳川か家康を東照權現の名を以て神として久能山に祭祀するか如きは實に祖先教の本尊たるに過ぎざるなり。

偉人英雄を神として崇拜する風習

偉人英雄衆庶を利し徳澤百姓に遍く、恩威共に行ばれば、是を崇拜して其死後に至る迄て神の尊稱を以て祭祀せらるるは固よりなり。天皇を人神と敬ふも此故なり。武甕槌命、經津主命は國土平定せし功有れば、或は常陸鹿嶋に或は下総香取に祭られたり。大己貴命は出雲國大御前に坐するるとき少名彥命に會して共に力を戮はせ天下を經營し、蒼生及畜産の爲に瘴病の方を定め、鳥獸昆虫の異を攘はんか爲に即禁厭の方を定めたるより百姓其福利を仰て是を神として崇拜せり。大國主神の名あるも是に依るなる可し。出雲國杵築大社に祭る神是なり。特に醫家は其生業の神として二神を祭祀する事最厚し、至日京都五條天神に詣て一歳の無病健康を禱るは其少名彥命を祭ればなり。斯如く一方には偉人英雄の福利を仰き、死後迄て神の尊稱を以て祭祀したると共に一方には其民人を慘害する事甚きより是を畏怖する餘神として崇拜せしもの多かりしなるへし邪神、荒神、猛神等の名は是等の神に向て興られたり。

我國古代の神として永今日に至迄て崇祀せられたる神は、大抵皆以上述
來りたる諸種の神に屬せり。曩に述へたる如く。動物植物等の崇拜も民
間に行われたれば次て此章に述さるへからざるも本書の餘白なるを如何
せん故に第二に起るへき神學概論に譲るか故に今是を略せばなり。

三項 理想神と實在神の同化

人民の理想上になりし神と實在せし神との二種ある事を
論せしか我國の古史、古事記、日本紀に於ては二類共に
同化せられたる者多し、日月星辰山川草木等、天地間の
重要なる萬象に就て、彼等か其神として記する者を推定
せば左の如し。

- 太陽……………天照大神。月……………月夜見神。星……………天香々背男神。雷
- ……………大雷神。風……………級長戸邊神。雨……………高龍神。火……………軻戩突

智神。水……………速秋津日神。土……………健土安神。山……………大山祇神。

鑛山……………金山彦神。野……………野推神(草野姫神)海……………大綿津見神

。水……………句々迺馳神。草……………草野姫神。穀物……………倉稻魂神。

右の如く天地萬象皆其支配する神ありとして信せられたり而して是等の諸神は所所に崇祀せらるるなり。尙是等の神を數れば枚擧するに遑わらざるなり。

今や翻て古史を案するに、實に我皇室の祖神に渡らせ給ふ天照太神は、朋徳の六台に照徹する事猶太陽の遍く宇宙を照す如くなるへし。其光威の炳耀なる事は猶太陽の赫々たるか如くなるへし。雖然。天照大神太陽の神なりと謂ふか如きは余は正否を知らざるなり。雖然。余は伊勢の大廟を以て直に太陽の神の鎮坐する所なりと謂ふか如き説なからん事を望む者のなり。元來余と豈語を忌て迷信を破る即倫理絶叫迷信打破てふ語は本書の大眼目と見て可なるへし。

我國の神話は、先に述べたる理想上に成りたる神と。實在せし神と。此二種の神か。同化せられたる神との事實を錯綜したるものなれば怪誕虚謬に見ゆるは素より免れざる所なり。雖然。紛雜なる糸も細に練れば其緒や見出すべし。古事記は筆を天地初發のときに採れり。日本紀は天地未割のときに採りぬ。紀に依れば、古天地の未だ割れず陰陽の分れざることを渾沌たる事鵝子の如く溟涬にして芽を舍りり。其清陽なるものは薄靡きて天となり。重濁なるものは淹滞して地となる。精妙の合へるは搏き易く。重濁の凝たるは揚々難し。故に天先づ成て地後に定り。而して後神聖其裡に存せり。曰く開闢の初に州壤の浮漂へる事譬へば猶游魚の水の上に浮ふか如しと謂へり。余思ふに最漢文に擬へる虚飾のみ。且淮南子の立論に酷似するやを思へばなり。

天地の分漸く定りて高天原に成れる神は蓋し三柱あり。天之御中主神。高御産巢日神。神御産巢日神の三神なり。次に天之御中主神は高天原を文

配する神にして高御産巢日神神産巢日神は其名義の意味する如く造化の靈力を有する神ならん。次に國稚くして浮脂の如くし海月の如く漂へるときに莖芽の如く萌へ騰る物に憑て成れる神二柱あり。宇麻志斯阿訶備比古遲神。天之常立神の二神なり。而して日本太古の遺傳説に徴せば、以上是を別天の神と謂ふ。皆獨生の神にして是より以下の諸神は偶成の神なり。故に男神女神の異性を稱へばなり。或は謂ふ右の如き神話は古代人民の理想に出たるものと實在せし神々の行實と錯綜せられ。誤傳に誤傳を加へて混一せられたるものなりと。然に余は我國の創世説に就て種々の論議ありと雖も今是を述るを欲せざるなり。

第八節 結 論

一項 靈魂と形體との關係

莞爾として笑を含む者。勃然として怒を發し。勃然とし

て怒を發する者。亦愁然として泣く。嗚呼。心情の妙なる忽陽に。忽陰に。湧くか如く沈むに似たり。

古の學者は夙に此千變萬化の心情に注視し、靈魂に和魂荒魂の二種ある事を論せしなり。抑も宇宙自然の神は、人に靈魂を與へて形體と相關して生活を營ましむれども亦是を奪ひて形體と分離せしむるあり。約言すれば自然神は、人々の靈魂を隨意に奪興するの權力を有するなりと謂ふも焉んを學理を欺かざるなり。

而も自然の神にして一たび人身より奪去らば人生は死するとも他あらざるなり。斯如くは、靈魂と人身の分離の人生に於て最も恐る可きものなれば、常に靈魂をして人身を離るる様に神に祈らんとする念を生ずるは

素より當然なり、雖然、人生大壽あり。我獨永壽を欲すと雖も神の自然は當抵是を許さるるなり。強て是を神に求めて得らるべきやと思ふか如きは實に迷信の甚しきものなり。然に死は靈魂と形體との關係の分離なる事を悟れば必ずや靈魂の不滅なる事とも知らざるへからず。故に死後の遺體をも忽にせずして是か埋葬てふ種類の懇切なる禮儀を用ゆればなり。

二一項 人の神に對する依頼心

人は如何に神を崇拜すへやの程度を卜すへきなり。直言すれば人の依頼心は即ち神の價值なり。

神は宇宙の萬象を掌り。自然に人の運命をも支配し且自然に左右し得可きは無論なり。若夫天地自然の神意に背戾する事わらは忽地に自然の神罰有るは亦無論なり。果して然れば、預め神意を窺ひ、神に依頼して事を爲すの安全なるに如かざるへし。且神意は公平にして勸善誡惡の心深

しとすれば、是非曲直を争ふ場合に臨みても神に依頼して、審判するの正當なるに如かざるべし。と茲に於て易道世に起り終に卜筮を以て是を賣るもの有り。是之を賣卜と謂ふなり。支那に龜卜あり甲を灼て未來の事變を洞察し人の運命吉凶禍福をも判断の術に頗る妙なり。然に余は素より易道は未詳。雖然。余か易道に於て聊か悟る處の説を解かんと欲すと雖も本書亦餘白なきを如何せん。遺憾ながら茲に是を略し神學概論に於て耶か是を詳論すべし。

拙稿縷々數萬言。而も言はんと欲する處未是に盡きず。唯暫く要領を擧ぐるのみ。余嘗て宗教論に於て聊余か所見を公にするや。新聞雜誌既に多少の批評を加ふる在。余の深く感謝する所大方識者は正を吝む無くんは幸甚。

神人論 終

明治卅八年八月十二日印刷
明治卅八年八月拾八日發行
明治卅八年拾二月廿日再版

(定價金拾貳錢)

著作者 佐々木清水

神戸市三宮町百九拾四番地

編輯兼印刷人 西山鉄太郎

發兌元 成業館

しとすれば、是非曲直と争ふ場合に臨みても神に依頼して、審判するの正當なるに如かざるべし。と茲に於て易道世に起り終に卜筮を以て是を賣るもの有り。是之を賣卜と謂ふなり。支那に龜卜あり甲を灼て未來の事變を洞察し人の運命吉凶禍福をも判断の術に頗る妙なり。然に余は素より易道は未詳。雖然。余か易道に於て聊か悟る處の説を解かんと欲すと雖も本書亦餘白なきを如何せん。遺憾ながら茲に是を略し神學概論に於て耶か是を詳論すべし。

拙稿縷々數萬言。而も言はんと欲する處未是に盡さず。唯暫く要領を擧ぐるのみ。余嘗て宗教論に於て聊余か所見を公にするや。新聞雜誌既に多少の批評を加ふる在。余の深く感謝する所大方識者は正を吝む無くんは幸甚。

神人論 終

明治卅八年八月十二日 印刷
明治卅八年八月拾八日 發行
明治卅八年拾二月廿日 再版

(定價金拾貳錢)

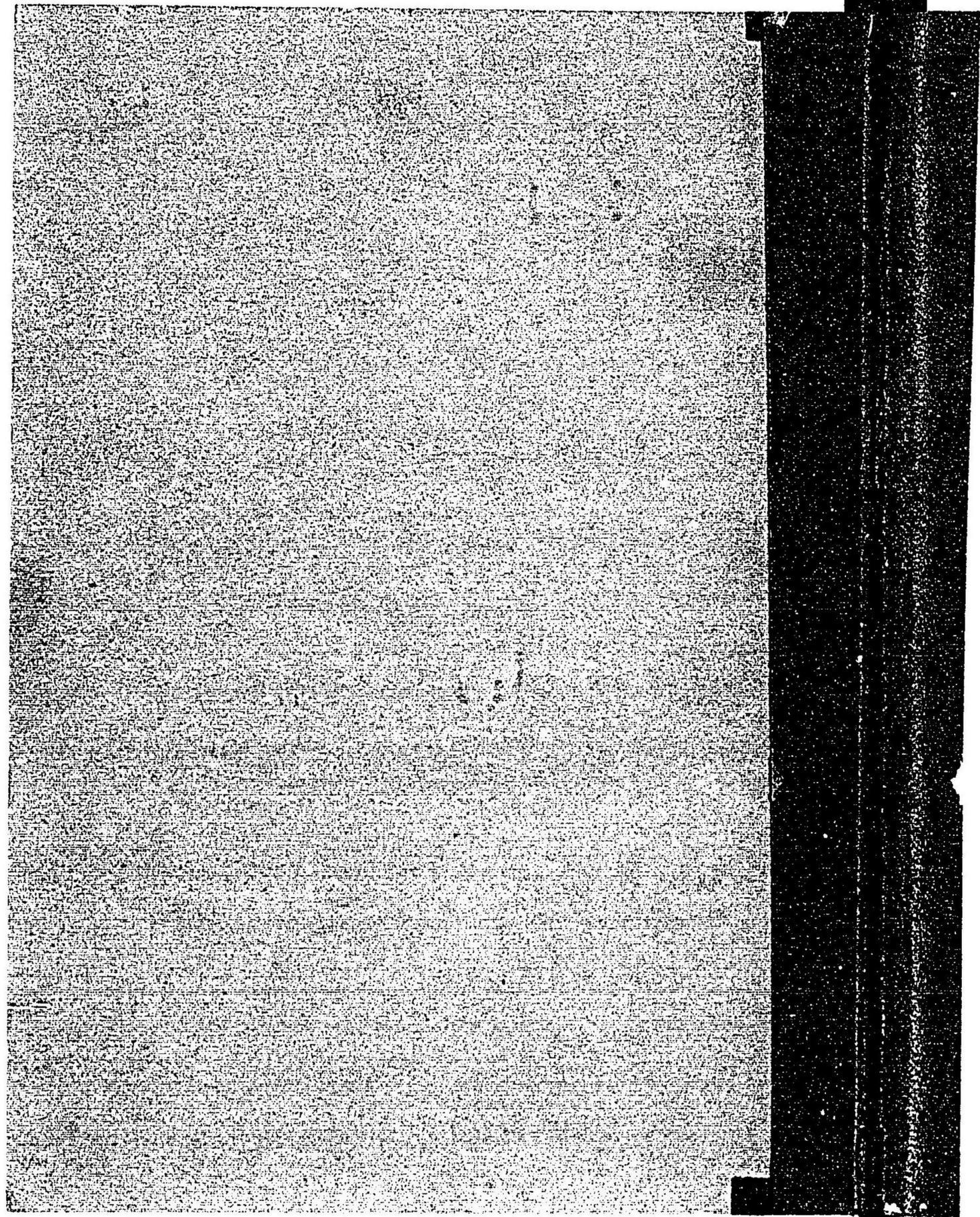
著作者 佐々木清水

神戸市三宮町百九拾四番地

編輯兼印刷人 西山鉄大郎

發兌元 成業館

D-60



6

神人論

佐々木清水

国立国会図書館

013675-000-7

特47-766

神人論

佐々木 清水/著

M38

ABA-0146



生

